



日本国際飢餓対策機構 (Japan International Food for the Hungry: 略して JIFH) は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981 年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合 (Food for the Hungry International Federation) の一員として、18 ヶ国 60 の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「こころとからだの飢餓」に応える働きをしています。

2013 年 ONE WORLD カレンダー 申し込み受付はじまる！



毎年皆様にご愛用いただいております 国際協力カレンダー「地球家族」2013 年版の購入申込の受付を開始いたします。

例年の壁掛型にハンガー・ゼロ支援カレンダーとして卓上型が加わりさらに便利になりました。ぜひ両タイプセットでお求め下さい。

壁掛型 縦 54cm×横 36cm 1 部 1,050 円
卓上型 縦 12.5cm×横 16cm 1 部 600 円
2012 年 9 月中旬に両タイプをセットでお申込み頂いた場合に限り、税込 1,500 円とさせていただきます。

(送料別途要)
なお、壁掛型は企業名などの名入れも承っております。お申し込み、お問い合わせは、㈱キングダムビジネスまで。

TEL : 072 (940) 6814

FAX : 072 (940) 6824

<https://www.kbwin-win.org>

カレンダーのお届けは 10 月上旬から随時させていただきます。

今年も全国で世界食料デー

今年のテーマは「ハンガーゼロの世界を目指して…平和と飢餓」です。9～11 月に行われる各大会では、飢餓啓発の講演や現地での活動報告、音楽プログラム、チャリティーバザーなどが行われます。ぜひ参加と一食募金運動にご協力をお願いいたします。詳しい問い合わせは東京事務所まで。

ハンガーゼロ・サポーター大募集中！

今すぐ 各種支援の お申し込み ができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

- ☐ ハンガーゼロ・サポーターとして協力します。
毎月 () 円 (1 円 1,000 円)
- ☐ チャイルド・サポーター (世界里親会) になりたいので説明書 (申込書) を送ってください。
- ☐ 海外スタッフ・サポーターとして協力します。
毎月 () 円 (1 円 1,000 円)
- ☐ JIFH (日本国際飢餓対策機構) サポーターとして協力します。
毎月 () 円 (1 円 500 円)
- ☐ 郵便自動引落し申込書を送って下さい。
- ☐ その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名: _____ 男・女

〒 _____
フリガナ
住所: _____

(電話) _____

▼申込日: _____ 年 月 日▼

FAX・072-920-2155

ハンガーゼロ
自販機設置
で飢餓対策

昨年 2 月から始まった「ハンガー・ゼロ自販機」は、現在、㈱ロングライフの 4 施設を始め、社会福祉法人キングスガーデン三重の高齢者福祉施設、教会等、全国で 10 ヶ所に設置されています。ペットボトル 1 本ご購入につき 10 円が支援金にあてられます。また、CO2 排出を抑えたノンフロンヒートポンプ仕様となっており、環境にも配慮されています。電気代を削減できるのも魅力です。(月額平均 1,840 円) 設置場所に合わせたオリジナルのデザインも好評を頂



いています。毎月の電気代は必要ですが、初期費用は一切かかりません。お気軽に大阪事務所までお問合せ下さい。

2012 年 5 月までに寄せられた募金は 234,642 円になりました。募金は、飢餓と貧困に苦しむアフリカの人々ために使わせて頂きました。ぜひ自販機設置による飢餓対策にご協力ください。

ハンガーゼロ・サポーター 2133 円。ぜひあなたのお知り合いにもお知らせください。



日本国際飢餓対策機構

2012 No.264

7

飢餓対策 News



アフリカのウガンダから東北被災地の人々に希望を届けるためにワトト・チルドレンズ・クワイアがやって来た！(7 頁に記事)

今年の 5 月 31 日、厚生労働省は 21 回目となる「完全生命表」の中で、2010 年の日本人の平均寿命は、男性 79.55 歳、女性 86.30 歳であると発表しました。前回の調査時 (2005 年) より女性は 0.78 歳、男性は 0.99 歳上回っています。日本は世界一の長寿国です。

しかし、開発途上国と言われる多くの国々、特にアフリカ諸国は平均寿命が 50 歳前後と、平均寿命が 75～80 歳の工業先進国と比較すると極めて短命であることが分ります。これは開発途上国における新生児、また 5 歳未満の子どもの死亡率の高さ、戦争や紛争によって短期間に集中して若者の死亡が多いことも原因とされています。そして、これらの根底にあるのが極めて厳しい飢餓と貧困の現実です。

アフリカは様々な天然資源に恵まれた豊かな大陸です。しかし、そこに生きる多くの人々はその豊かさとは無縁の極限の生活を強いられています。現在、世界で急激な経済発展をとげている国々は、明確な国家戦略のもと経済や軍事の大国を目指し、資源確保に奔走しています。

そのために各国は、毎年アフリカ諸国に何百万ドルも注ぎ込んでいます。しかしそれはアフリカ諸国の貧困問題や医療、社会問題の解決に費やされることなく、一部の権力を有する者の私腹を肥やし、結果として資源の流出による貧困の固定化を生み出す原因となっています。

このような構造的暴力ともいえる社会システムをなんとしてでも変革してゆかねばなりません。

貧困を固定化する社会構造の変革を

そのためには、神の義に生き、弱い立場にいる人々に仕える真のリーダーの存在が求められています。JIFH は、夏のワークキャンプや各事務所において行われるファシリテーター・トレーニング講座の継続実施を通して、「わたしから始める、世界が変わる」生き方を実践する人が育成されて行くことを心から願っています。

「貧しい者の開拓地に、多くの食糧がある。公義がないところで、財産は減ぼし尽くされる。」(箴言)

日本国際飢餓対策機構 啓発総主事 田村治郎

1 分間に 17 人 (うち 12 人が子ども)・1 日に 2 万 5 千人・1 年間では約 1,000 万人が、飢えのために生命を失っています。

■発行者 岩橋竜介

■発行所 一般財団法人 日本国際飢餓対策機構

Web サイトアドレス <http://www.jifh.org/>
e メールアドレス general@jifh.org

■募金方法 ※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウェブサイトで

身近に
便利に
なりました



●郵便振替 00170-9-68590 / 日本国際飢餓対策機構
●他の金融機関からの自動振替 ●クレジット、デジタルコンビニ

大 阪 〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1

TEL (072)920-2225 FAX (072)920-2155

東 京 〒101-0062 千代田区神田駿河台 2-1 OCC ビル 517 号室

TEL (03)3518-0781 FAX (03)3518-0782

愛 知 〒466-0064 名古屋市中区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター 2F

TEL (052)731-8111 FAX (052)731-8114

広 島 〒730-0036 広島市中区袋町 4-8 CLC ブックス 2F

TEL (082)546-9036 FAX (082)546-9037

沖 縄 〒901-0156 那覇市田原 3-8-1 ユリ香ハウス 201 号

TEL (098)859-4585 FAX (098)859-4540

東 北 〒980-0012 仙台市青葉区錦町 1-13-6 エマオ 2 階 E

TEL (022)217-4611 FAX (022)217-6651

毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所 (八尾市)、生活愛、関西地区のボランティアの皆様が発送作業のご協力をしてくださっています。

感謝

ボリビア駐在 小西小百合

苦しみと

喜びと

これまでの2回のインタビューでは、小西小百合から海外スタッフとして孤独感や文化の違いに悩んだこと、また“ひと”の人生に深く関わる喜びをきました。最終回となる今回は、海外で働きたい人へのアドバイスを語ってもらいました。

◎海外ではどんな人が求められているのでしょうか

専門的な技術や知識を持ち、かつ既に経験があって行って直ぐに役立つことができる人です。農業やマーケティング、教育など様々な分野で即戦力になる人が喜ばれます。しかし世界里親会の地域担当スタッフのように、現地の同労者たちと行動を共にしながら徐々に必要な仕事を覚えていき、経験と実力を積んでいくという方法もあります。

◎では海外で働きたいと考えている人にアドバイスを

行く国が決まっているなら、まず言葉の勉強ですね。何といってもコミュニケーションが大切です。それから独りでも生活できる人。孤独と闘わなければならぬと思いますので。またユーモアのセンスや順応性ももちろんあるほうが良いでしょう。

私の場合、胃腸が丈夫で好き嫌いなくなんでも食べられたことも役立ちました。現地スタッフの人たちと一緒に食事をし、また地域での会議や家庭訪問の時に先方が

ら出されたものを何でも喜んで食べることで、心が開かれて信頼関係を築いていくことが出来た部分も大きかったと思います。食事は重要なコミュニケーションの場です。また“自分にはこういう知識や経験があり、この人たちを教え指導したい”などという思いではなく、“現地の事情を知らない自分がまずスタッフや地域の方々から色々教えて頂き、学ばせていただく。その上で小さくても自分が出ることを、また真の意味で現地の方々の必要に応える働きを人々と協力しながら進めていきたい”という謙虚な思いが必要です。外部から持ち込んだものや自分のやり方で物事を進めしまうと、結局地域の人々のためにならなかったという大きな間違いを犯してしまう危険性があるからです。

◎最後に里親さんとあなたをサポートしてくださっている方々にひとこと

感謝の言葉はひとことでは足りません。私を継続して支援してくださる方々、また子どもたちを支

援して下さっているチャイルド・サポーターに心から感謝しています。この方々のご支援があるからこそ、活動を続けることが出来るのですから。チャヤでは元里子だった子どもが勉強し成長して、自分の地域に戻って他の人々に仕え始めています。そしてその子を模範とする子どもたちが多く起こされているのです。もちろん長い間には途中で学校をやめてしまう子どもたちもいますが、子どもたちを支えて下さるサポーターさんがおられるからこそ、このように周りによい影響を与える子や青年が育ってきてその地域が変えられるという素晴らしい変化が起こったのです。

日本の皆様が送って下さっているお祈りやご支援は、現地でこのように大きな実を結び、一人の“ひと”の人生を変えることができるのだということをぜひ知って頂きたいです。自分の子どものために惜しみない愛情を注ぐように、その愛情の何分の1かを、このような開発途上にある国の子どもにもわかち合ってくださいる方が一人でも多く起こされるようにと願っています。（おわり）

小西小百合は、6月末からボリビアに戻り新しい支援地となるアサワニとリオカイネで活動を行っています。

ハンガーゼロ・アフリカ モリンガ・プロジェクト 持続可能なコミュニティを目指して

ザンビア北部、コンゴ共和国との国境に広がる銅山地帯にあるモパニ鉱山近くのムフリラ（MUFULIRA）村。日本国際飢餓対策機構は現地NGO、ザンビアFHIと協力しながら、この村でモリンガ農園を造り、栽培を始めています。



ザンビア

生命の木、モリンガでの栄養改善に期待

モリンガは、地球上で現在までに発見された可食植物の中で、最もバランスよく豊富な栄養素を含んでいる樹木です。ミネラル・ビタミン・アミノ酸など体に必要な成分を非常に多く含有しています。その高い栄養価からTree for Life（生命の木）と呼ばれています。成育旺盛で、半年で4～5メートルに成長します。

このモリンガはインド原産といわれ、熱帯、亜熱帯地域で生育が可能です。貧困・飢餓に苦しむアフリカや中近東、東南アジア、南アメリカで栽培すれば、十分な栄養を摂れないでいる人々を助けることができる植物と考えられています。

女性高齢者の雇用機会として

ハンガーゼロ・アフリカのプロジェクトの1つとして、当機構はこのコミュニティでモリンガプ

ロジェクトを進めています。

この村には、800人ほどの高齢の女性が暮らしており、その多くはHIVで子どもを亡くし、孫の面倒を見ざるを得ない状態です。しかし、収入源もなく、何の支援も受けられない人がほとんどです。その内の60人の方々を、モリンガ農園を造るために雇いました。彼女たちは、土地を開墾してモリンガの苗を育てると共に、聖書の学びもしています。JIFHからは彼女たちの生活を支えるため、毎日の食事に加え、毎月1人につきメイズ粉（主食のンシマの原料：とうもろこしの粉）25kgと6メートルが支給されています。

この地域では、焼畑で単一栽培が行われてきましたが、それでは土地が痩せてしまいます。モリンガ農園では持続可能なコミュニティを目指して、ポリカルチャー（複合品種混合栽培）



半年で大きく成長するモリンガ

を取り入れています。これまでに5,000本の苗が植えられましたが、ポリカルチャーになるよう、モリンガだけではなく野菜やマンゴーなどの他の樹木も一緒に植えています。

第1段階として、この農園でモリンガの100万本の苗を育て、支援を必要としている他のコミュニティへ提供し、そこでも農園を持つことができるよう手助けをしていく予定です。そして、持続可能なモデルコミュニティを目指していきます。

ぜひ皆さんもハンガーゼロサポーターに加わって支援ください。よろしくお願い致します。

世界里親会 フィリピン

国際飢餓対策機構フィリピンとの協力によって始められたパリパラン地区での世界里親会の働きが、2012年5月末日をもって現地の方々に委ねられました。7年間の活動に関わってくださった里親の皆様、里親賛助会員の皆様のご支援に心から感謝を申し上げます。



パリパランの自立が始まる喜びの日

5月19日、活動地区にある小学校において地域の自立を記念する式典が行われました。式典には、里子、保護者、協力教会の牧師先生、『CDPカウンスル』と呼ばれる地域リーダーグループ、世界里親会スタッフが参列し、日本から駆けつけた14名の里親様と共に「支援の完結」そして「地域の自立」という大切な瞬間を分かち合うことができました。

■地域の自立指標に到達■

7年間の活動を振り返った関係者のスピーチの全てに、日本の里親の皆様へのあふれる感謝が述べられていました。地域スタッフのマリーローズさんが、あいさつの中で涙があふれ言葉につまった時、すぐに会



子どもたちは美しい民族ダンス披露しました

場中から応援の拍手が起こりました。そして、彼女の名前を呼ぶ大きな声で会場が一体となったのです。彼女を通して築かれた地域の人々との信頼関係がどれほど強いものであったか、その信頼関係によって世



感謝をのべるマリーローズさん。左はFHフィリピンのデビー代表

界里親会の支援が実を結んできたことを理解するに十分な光景でした。

地域の人々は、世界里親会から様々な訓練（貯蓄・衛生・職業技術など）を受け、7年をかけて地域で起る問題を自分たちで解決する力を身につけました。地域自立の指標と

していたところに到達することができたのです。地域の人たちが希望と自信をもって自らの力で歩いていく証として、未来への希望を象徴する「鍵」が、世界里親会から『CDPカウンスル』へ式典の中で授与されました。にこやかに誇らしげに受け取られていた様子がとても印象的でした。

■里子の生活環境を確認■

現地滞在中、里親の皆様はそれぞれの里子の家庭を訪問し、里子の家族と一緒に夕食の時間を過ごしました。里子の生活が改善されたことを実感し安心できた方もいれば、一方で、家屋の様子から家計の不安定さを察して支援終了に不安や疑問を抱いた方もいらっしゃいました。しかしながら、滞在中の折々に参加者同士で感じたことや見聞きしたことを分かちあう中で、最終的には皆さまが地域のこれからの働きに委ねようという気持ちを持たれました。日本と比べて生活環境は見劣りするけれ

ども、「子どもたちの笑顔が自然だった」、「神様の愛で満たされている」、「地域の力に期待したい」と心から思えたからだそうです。

パリパラン地区支援完結にあたり里親さまから「手紙が出せなかった。送金だけの支援でごめんなさい」といった言葉を何度もお聞きしました。しかし、自立しようとする人々の事を覚え、尊いご支援を具体的な形で捧げていただけたからこそ、人々が励まされ地域が変わることができたのです。

（報告：世界里親会・山田香菜）

チャイルドサポーター募集中！

世界里親会では、ボリビア、ルワンダ、フィリピンの子どもたちをご支援くださるサポーターを募集中です。また7月からケニアのサポーターの募集も開始します。子どもたちが笑顔と将来への希望を持つことができるように、共に働きを進めてくださることを感謝します。

「行ってみてよくわかりました!!」 訪問ツアー参加者の体験記

これからも祈りで支援続けます

伊藤優子

私は6年前にFH世界里親会を通して、フィリピンに住む男の子ロナルド君の里親となりました。会う機会が最後となるため、思い切って今回の里子訪問ツアーに参加しました。

クロージングセレモニーのため訪問した小学校では、たくさん子どもたちが元気いっぱい笑顔で迎えてくれました。そこでは、1人の里子さんとパリパラン地区で活躍されている牧師先生、FH現地スタッフの話聞くことができました。話を聞きながら、これまでの自分は機械的に送金をするだ



伊藤さんとロナルド君の

けではなかったか、子どもたちの生活の様子やスタッフの日々の労苦にどれほど気持ちが向いていただろうかと自分の内面を探られる思いがしました。そして、直接の支援が終了する今、祈りによる支援を続けることが自分の責任であることを教えられました。

夜はロナルド君の家を訪問し、お母さんが心を込めて準備してくださった夕食と一緒に頂きました。ロナルド君の家は清潔に管理されており、ロナルド君も家でくつろいでいる様子なので安心しました。

ロナルド君がこれからも勉強を続けていくこと、教会生活を守り霊的に成長して神様に用いられる人になること、お母さんとロナルド君を通して家

族皆に神様からの祝福があるように祈っていききたいと思います。

里子の成長に嬉しい驚き

井上美穂

私の里子は、Lovelyという女の子です。2006年から支援をさせていただいています。2007年の夏、FHのワークキャンプに参加した際、一度対面することができましたので、今回は5年ぶりの再会でした。はじめに会った時の彼女は驚くほど体が小さく、緊張のせいか言葉も少なく、一緒にした食事もほとんど手をつけませんでした。

そんな彼女も14才になり、すっかりお姉さんになっていました。友だちに囲まれ、セレモニーではなんとダンスも披露してくれました。彼女のお家を訪問した際にはたくさん英語で話しかけてくれ、きちんと答えられない私の方が恥ずかしくなってしまうほど。そして今度は彼女の方が食事を勧めてくれ、おいしいご飯をいただきました。自信をつけ、がんばって勉強している彼女にはまだ義務教育が2年残っています。支援終了にあたって学費はどうなるのだろうか？というのが一番の不安でしたが、ここにも変化がありました。Lovelyのおばあさんが新たにお米を売る商売をはじめ、収入を得ている他に、今ではご近所の5家族を見回るリーダーもされているそうです。

一つ一つは書ききれませんが、地域の大人たち、複数の協力教会が連携し様々な問題解決にあたるしくみができていることを知り、安心しました。おばあさんも、自信をつけられたように感じました。里親会の働きが、子どもたちだけでなく、大人たち、地域にも変化をもたらすことを体感できたツアーでした。



式典にのぞむ訪問ツアー参加者（右端に井上さん）

東北にワトトの希望の歌声

震災で大きな苦しみや悲しみの中にある東北の皆さんに、いまは「希望」をもって生きている私たちの歌や踊りや話を分かち合いたい。そのような願いを込めて、アフリカのウガンダから「ワトト・チルドレンズ・クワイア」が被災地を訪れました。当機構主催のコンサートが仙台市、石巻市、南三陸町のホールや学校などで行われ、エイズや内戦によって親を失った子どもたちが繰り広げる奇跡のパフォーマンスで各会場には人々の感動の輪が広がりました。



「Mambo Sawa」人生は素晴らしいと歌うワトトのダイナミックな歌と踊り。希望を失った人々に希望を与える、それがワトトの願いであり、地震、津波、原発事故に見舞われた東北の人々にも神様の愛によって希望をもって欲しいと伝えてくれました。

ワトト（WATOTO）とはスワヒリ語で子どもたちを意味します。同クワイアは、アフリカのウガンダにあるキリスト教会の牧師夫妻が、エイズや内戦などで親を亡くして路頭にまよっている孤児や、夫を失った女性を救済する働きから生み出されました。現在は、ワトト子ども村とよばれる場所で2,500名を超える孤児（未就学児から大学生、青年まで）が共同生活を続けながら、成人にいたるまでのケアをうけています。

これまでも数回来日をしており、当機構はその活動理念に賛同し、ツアー運営の応援を続けてきました。今回のコンサートは、東日本大震災で苦しむ人々をぜひ励ましたいとのワトトの強い願いと、当機構の被災者復興支援活動が一つとなって被災地訪問が実現したものです。また各コンサートの開催にあたっては、当機構と被災地支援活動を行っている支援団体や教会、地元の民生委員の方々などの応援も大きな助けとなりました。

6月4日午前に行われた仙台市立南材木町小学校でのコンサートには、全校生徒337名が参加、保

護者や近隣の方々も多数来会されました。南材木町小学校は、吹奏楽や合唱で県代表に選ばれるほど音楽教育に力を注いでおり、今回の訪問も学校全体で取り組んでいただきました。コンサートでは、ワトトの歌と踊りとともに、児童も参加してアフリカンダンス体験や質問コーナーなどの交流プログラムも盛り込まれ、とても楽しいひとときになりました。

みんな明るくて、強いねえ！

その日の午後は、石巻市でもコンサートが行われ、現在は使われていない渡波小学校の体育館（建物は再整備済み）を会場に近隣の仮設住宅などから150名近い方々が来てくださいました。仮設住宅から来られた70代位のご夫妻は、プログラムの途中にあるダンスタイムで楽しそうに身体を動かして、「ワトト最高でした。一緒に踊りまくりました。子どもたち大変な境遇なのに、希望をもって歌っている姿にジーンときました。まだ小、中学生なのにみんな明るくて、強いねえ」と笑顔と涙で温かい言葉を残してくださいました。

また別の婦人は「私はクリスチャンではないけれど、今回のコンサートでもキリストさんがみんなの心をつなげているのかなと感じます。頑張っているワトトの子どもにも励まされました」と語られました。

当機構は被災地の人々の復興のためにこれからも物心両面の支援



を続けていきます。ワトトの21名の子どもたちは、東北滞在にあたり、当機構が建設を応援した仙台市のキリスト教会と石巻市のボランティアセンターに宿泊することができました。これも支援者の皆さまの応援によるものです。また南三陸町でも地元で根ざした被災者復興支援の動きの輪が大きく広がりはじめています。ぜひこれからも祈りと応援をお願いいたします。

（報告・広報）

南スーダン
ハンガーゼロ
アフリカ活動
地を訪れて…

大学院生
宮澤 悠

一枚の有名な写真があります。「ハゲワシと少女」。痩せ衰えて、うすくまる少女の背後に、一羽のハゲワシがたたずむ写真です。私はこの写真を、中学校の教科書ではじめて目にしました。とても衝撃的だったので、しばらく先生の話が耳に入らず、ずっと写真に見入っていたことを覚えています。しかし、この写真が撮影されたのが、現在の南スーダンにあたる地域であることを知ったのは、今年、実際に現地を訪れた時のことでした。

日本からドバイ、ケニア経由で2日、小さな空港が赤い大地の上に現れます。世界で一番新しい国家、南スーダンのジュバ空港です。銃を持った兵士、未舗装路を行きかう国連の車、路上にあふれる人々…。車中から見た南スーダンは、活気にあふれていました。携帯電話会社の広告にも「Independence means work,



マブイ学校のスタッフとともに左から3人目が宮澤さん（訪問は今年5月、当機構スタッフと共に）

こんなにいっしょに笑えるなんて



とても明るくて親切だったマブイ小学校の子どもたち

work, work!（独立したのなら、働け、働け、働け！）」というキャッチコピーが見られるほど。しかし、働きたくても職がないというのが現状だそうです。一日ジュバで休んだ後、J I F Hが支援するマブイ小学校のある、ルンベックへと向かいます。

目がキラキラ輝く子どもたち

日本に戻ると、多くの方から同ような言葉を頂きました。「たいへんだったね」、「ご苦労様でした」、「すごいところに行ってきたな」。お気持ちは大変ありがたいのですが、その都度何か違うなあと思いました。私はこう言いたかったのです、「楽しかったで！」。確かに、ルンベックの食糧事情、衛生状態などは、決して良いものでは

ありませんでした。しかし、ルンベックでは皆がとても暖かく、親切でした。子どもたちは目をキラキラと輝かせ、私と鬼ごっこをして遊びました。大人には母語であるディンカ語を教えてもらい、私が正しく発音できないのを見ると、手を叩いて笑ってくれました。表現に困りますが、あのときとても幸せだった気がします。日本からはるかに遠いアフリカで暮らす国も言葉も肌の色も違う人たちと共に笑いあえるなんて…。

まだ、多くの問題が南スーダンには山積しています。子どもたちには給食だけが一日の食事だというほど、食糧が不足しているのが現状です。しかし、まずは南スーダンの人と友達になること、これが最初の一步だと思いました。今回の訪問に際して、祈りと応援をいただいた教会の皆さんと、南スーダンの人々に引き合わせて下さった、神様に感謝いたします。ありがとうございました。